

# 村上春樹について 語るときに 我々の語ること

ローランド ケルツ  
Roland Kelts  
東京大学講師

## クールな知性と ロマンティシズム

アメリカで村上春樹の作品が好きな人は、単にその作品が好きであることに留まらない。村上作品に恋をしている。自分たちの見つけた意味をつかんだまま離さず、本に愛情を注ぐ。自分の夢を映す色調や色彩、叙情的でありながら純粹で、時によって何とも言えないものを村上の語りに見出す。わかっている、感じているのだけれども、説明できない何かを。

もちろん、アメリカの読書好きなら誰でも村上作品が好き、村上作品を愛しているというわけではない。村上作品を好まない人たちは、アメリカの村上信奉者、正確に言うところ「村上ファン」が魅了される部分そのものについて批判するのが通例である。例えば、曖昧でつかみどころのない終わり方、姿を消す登場人物、時によっては幻惑的でありながら、冷やかかでクールな忘却のかなたに巻き取られ忘れられてしまう物語の糸などである。

村上に対するアメリカの評論家の反応が錯綜していることについて何年か前に書いたことがある。村上は、フラ

ンツ・カフカ（村上はカフカよりもずっと温かいし、カフカほど不安に満ちてはいない）、トマス・ピンチョンやドン・デリーロ（村上ほどピンチョンほど娯乐的ではなく、デリーロほどストイックでもない）、レイモンド・カーヴァーやレイモンド・チャンドラー（この2人の共通点は同名であることだけ）、さらには三島由紀夫と比較された。三島と村上には、国籍が同じという以外に共通点はない。

私ができるようなことを書いてから、村上は、欧州の大先輩であり彼よりも不気味な作品を残した作家の名前を冠した賞、フランツ・カフカ賞を受賞した。カフカ賞を受賞後にノーベル賞を受賞した者の例は少なくない。村上は、ヒップな現代小説というジャンルの中ではアメリカの先輩ピンチョンやデリーロを超えた。クールな知性を保ちつつ、村上の作品には若い読者の心を掴むロマンティシズムがある。日本でカーヴァーを有名にしたのは村上である。さらに、25年来の夢であったF・スコット・フィッツジェラルドの『華麗なるギャツビー (The Great Gatsby)』の翻訳の合間に、チャンドラーに戻り、『長いお別れ (Long Goodbye)』の翻訳

も手がけている。

## 作家アップダイクが評した 「日本人的精神性」

要は、村上が受けた「西欧の」影響や村上が本質的に持っている「日本人的なもの」から村上を理解しようとしても（一部のアメリカ人は今でもこのやり方を変えようとしない）、意味がないということである。

ジョン・アップダイクは、文芸評論がその最新作を超えるとは言わないまでも同レベルに達している数少ないアメリカの作家・知識人である。しかし、村上の最新作『海辺のカフカ (Kafka on the Shore)』の英訳版についての彼の書評はなかなか示唆的とも言える曲解だった。

『ニューヨーカー』誌（長年アップダイクを後援）に掲載された書評を見る限り、このアメリカの大作家は、村上が一般読者と評論家の双方に支持されている理由をなんとか説明しようとする死である。そして、こう書いた。

「この小説は、まさに読み出したら止まらない。それでいながら、読者を悩ませる難解さも持っている。それは、作品の本来の力以上に心を掴むもので



『ニューヨーカー』2005年1月24、31日号に掲載された'Subconscious Tunnels (潜在意識のトンネル)'と題されたアメリカの作家ジョン・アップダイクの書評

あり、おそらく作者が望んでいたほどの感動は呼ばない」  
何と可も不可もないコメント。アップダイクは、舞台のカーテンの下へとコンコンと逃げ隠れるかのようにこう締めくくっている。「本質的空虚感の上に皮をかぶせただけのもの、変わりゆく海辺……半分は空である存在。そ

れを讀めるには日本人的精神性が必要なのだ」

何が言いたいのだろう。

これでは、このアメリカ屈指の小説家であり文芸評論家は、村上の作品世界の崇高な謎を解き明かす最中、そのクライマックスとも言える場面で、舞台を降りてしまったかのようだ。「日本人的精神性」とは何のことを言っているのか。村上の小説を理解するには日本人的精神性が必要であるというならば、なぜ村上はアメリカをはじめ、世界でこれほど人気があるのだろうか。

『海辺のカフカ (Kafka on the Shore)』が村上の代表作の一つに入ることになるかどうかはわからないが、この批評に見るアップダイクの反応が、如何にバツの悪そうで困惑したものであるかは明白だ。

### 不調和の源にある 「ホット」と「クール」

ここに村上という一人の作家がいる。この作家は、『ねじまき鳥クロニクル (The Wind-Up Bird Chronicle)』で見事に見せたように、「軽い現代の都会の倦怠と消費主義」と「歴史的な恐ろしい出来事」とを融合することのできる、

小説の最先端を行く国際的作家として認められた「クール」な一面を持つ。彼の作品は『ニューヨーカー』誌に定期的に掲載され、ニューヨークのバーンズ・アンド・ノーブル・ブックスストアでは、彼の読者たちが長蛇の列を作る。そこに、彼はガードマンに囲まれ、分厚い黒のサングラスをかけて平然と現れ、ロックスター並みの扱いを受ける。

片や、アメリカの小説家であり評論家でもある人物（私はこの人物の代表作が傑作であることを心から認めており、彼の作品や評論を手本としている）。この人物は、アメリカの50年代に育ち、才気縦横。ハイカルチャーとローカルチャー、アートとポップ、キリスト教と異教信仰、善の光と悪の闇など、二つを対比する西洋の二元論的思考の教えを受けている。

私は、不調和の源は以下であると考える。すなわち、村上は「ホット」（温かい、情熱的、日本的に言えば、ウェットで感情的）でも「クール」（超然として、皮肉っぽい、計画性がある）でもない。最高傑作では、村上はホットでもありクールでもある。すべてを持ち合わせているとも言えるし、どちらも持ち合わせていないとも言える。

ローランド・ケルツ●ニューヨーク大学講師、ラトガース大学講師などを経て現職。現代の日本文化や日本文学を専門とし、日米の主要新聞・雑誌への寄稿、文芸誌編集など活発に文筆活動も行なう。アメリカで新たに発刊された文芸誌A Public Space創刊号においては、日本文学特集の編集を担当した。今年、Japanamerica: How Japanese Pop Culture Has Invaded the US が出版される予定。母方の祖父は、戦前から戦後にかけて活躍した詩人、佐伯郁郎

写真提供：朝日新聞社

## 文学を通して 二元論的思考を葬り去る

21世紀に頭角を現してきた日本のアーティストについて書いた近著『ジャパナメリカ (Japanamerica)』のために手塚プロダクション（故手塚治虫のプロダクション会社）を取材したとき、私はプロデューサーに、「鉄腕アトムはなぜ生粋の日本のキャラクターなのか」と訊いてみた。ウォルト・ディズニーは、ミッキーマウスを生粋のアメリカのキャラクターだと考えていた。日本でミッキーマウスに相当するアトムは生粋の日本のキャラクターだったのだろうか。そうだとしたらその理由は。

プロデューサーは次のように言っていた。「アトムは『悩む』キャラクターなのです。日本は、いつも何かの中間に位置している国で、例えばそれは中国とアメリカ、東洋と西洋の間だったりします。日本のキャラクターはそのグレーゾーンの中に生きる、さまざまなきれんまを抱えた存在なのです」

89年のベルリンの壁の崩壊前、91年のソ連崩壊前、そして01年の9・11事件以前ならば、このグレーゾーンは多少の関心は集めただろうが、漠然とし

過ぎていて現実味のあるものではなかった。ところが今では、アップダイク時代のこぎれいな二元論的思考、そして、まるで「テロ」という抽象名詞が敵対国であるかのように「テロとの戦争」を展開するアメリカの方向性は、確実に時代遅れになっている。

村上作品は、こうした二元論的思考を、文学を通して歴史の闇にしかるべく葬り去ろうとする動きの最先端にいるのだ。こうした二元論的思考は、地球に2つの「スーパーパワー」が存在していたときには役に立ったが、もはやスーパーパワーは1つしかなく、しかもその威力は衰えつつある。

アップダイクが村上を理解するのに苦労するのは、村上の作品が世界を二元的に見ていないからである。今年3月に東京で開催された国際シンポジウム「春樹をめぐる冒険」で、リチャード・パワーズは村上の才能を脳神経学の最新知識と分析法を駆使して読み解き、「(村上の作品は)いくつかの世界をまたがっている」と言っている。言わねばならぬ。私たちが今生きている世界は、曖昧で結論のない、複数の糸で織り成された村上の小説や、幻想的な押井守や宮崎駿のア

ニメーション、あるいは奇抜で突拍子もない浮世絵の世界にむしろ近いと言える。欧米の多くの評論家はなかなか認めたくないが、優秀な読者たちはそのことを知っているのである。

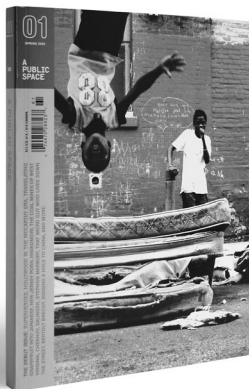
## 村上はもうアメリカを必要とはしていない

村上は、昨年ボストンで私に次のように言っていた。「アメリカの読者は何かを見落としているのではないかと思うことが時々ある。アメリカの読者は書評に頼りすぎ。本にこもる熱さを感じられること。それが大事。いつも完全にバランスを保っている必要はない。そうだよね?」

アメリカの評論家が公の場で「熱さがある」ということで文学作品を褒めている姿はとても想像できない。

しかし、私たちが芸術に求めるのはその熱さなのではないだろうか。アメリカ文学のバイブル、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』といえども、その真髓である熱さ、衝動、執念を除いてしまおうと、残るものはわずかである。

その国特有の情緒感覚がその国の人々を狼狽させる場合もある。その格好の例がフォード・ドストエフスキ



筆者が日本の現代文学特集を担当したアメリカの文芸誌A Public Space (創刊号)。村上春樹へのインタビュー、小川洋子、阿部和重、中原昌也の短編小説の翻訳作品を取り上げている

である。欧米やアジアの読者や作家、評論家には愛されているが、母国では嘲笑の対象となることが少なくない。今年、ボストンからニューヨークに向かう機中で隣り合わせた二人のロシア人に「ドストエフスキーをどう思うか」と訊いてみたが、ほとんど鼻で笑っていた。一人は「でも、お前はもろん好きなんだろう」とウインクをせんばかりに言っていた。

ドストエフスキーは、母国ロシアでは、熟れすぎの困りもの、見境のない告白本の作者、自制のできない男で、作品は「まとまりがない」、あるいは村上の言葉を借りれば「熱さ」が過剰、というのが通説になっている。

同様に、日本の知識階級では、「村上作品は絶賛されているが軽い」、「村上は大衆に迎合し、アメリカや他の国にまで読者層を広げている商業作家」という見方が大半を占めている。

しかし、それは間違いである。作家の逝去後に殿堂入りを果たすべき文学作品として村上作品を語るには、まだまだ早い。しかし、村上作品が、アメリカの文学界にある種のパラノイアをもたらしただけは事実だ。村上は、ホット一辺倒でもクール一辺倒でもな

い。また、大衆文学に徹しているわけでも純文学に徹しているわけでもない。アメリカの読者が村上の小説に恋をするのは、村上が登場人物を大切にすることである。アメリカの評論家は村上の知性と多才さを評価し尊敬している。村上は、アメリカについて延々と思いをめぐらせているが、もうアメリカを必要とはしていない。我々も同様である。

### 世界の文学の未来を 先導するのは誰か

村上春樹から始まった日本の影響の波は今では津波になっている。村上はアメリカの作家から大きな影響を受け、今、時代の転換期にその恩を返しているのである。感情を害さないように入念に計算されたその書評からうかがえるアップダイクの誤読からは未来が透けて見える。世界の文学の未来を先導するのはやはりアメリカやアメリカのアーティストではないのかもしれない。しかし、日本や日本のアーティストならば、それが可能かもしれない。

二元論的思考の時代はもう終わった。日本は、長年狭間にあったこともあり、刺激の多い未来、変幻自在な可能性と幅の広さを併せ持つ未来を担うには適

任である。京都で生まれ、神戸で育ち、東京で教育を受け、これまでの57年の人生でヨーロッパにもアメリカにも住んでいたことのある村上は、自覚はなくとも早くからその域に達していたのである。

2年前に村上から聞いた話をしよう。70年代初頭、同世代のサラリーマンが興じる出世競争の世界から抜け出したばかりのころのこと。東京でジャズ喫茶を開店するために妻の実家から借金をしたことがあった。

状況は厳しいいうえに、さらに厳しさを増していた。そしてある夜のこと。すかんぴんの彼は若い妻とともに散歩に出かけ、当面返さなければならぬ3万円をどうやって工面しようかと思案していた。

「突然2人は立ち止まった。2人とも気分はどん底。ところが、地面に封筒が落ちていた。ところどころには1万円札が3枚。2人は抱き合って泣いた。将来のことはともかく、明日の目処はたったのだから」

「それは本当の話？」と尋ねてみた。  
「本当さ」

これが彼の答えだった。

（原文は英語）